

両大戦間のアメリカのユダヤ人像

——アメリカ・ユダヤ系文学の伸長——

稲 田 武 彦

は じ め に

本稿は『研究論叢・第16号』の拙稿「アメリカ・ユダヤ系文学における初期ユダヤ人像」を承けて、アメリカのユダヤ人像の変容を両大戦間の当該文学のなかに探ってみようとしたものである。歴史ないし時代相の投影に色濃いものがうかがわれるが、この時期はアメリカに播種され発芽したユダヤ系文学の第2次大戦後の開花を用意する伸長期にもあたっている。ここではいくつかの視点ないし傾向によって考察を進め、記述の要領はほぼ前回は踏襲して小説を中心にその他のジャンルや非ユダヤ系の作品などを援用する。なお、背景説明として(A)の部分を入れたのも、前回同様アメリカのユダヤ人の移民前後の特異な事情を考慮したためである。

(A)

両大戦間は年代的にはほぼ1920年代および30年代にあたるわけだが、アメリカのユダヤ系市民にとって、この期間は一方にロシア革命を含む第1次大戦の終結(1918)とその処理によって醸成・胚胎された社会的ないし国際政治的状況とのかかわりを生じ、片方にナチスの大虐殺の血にまみれた反ユダヤ主義(anti-Semitism: なおこの用語については(2)の項参照)と、やがてシオニズム(Zionism)自体が血で購わざるを得なかったイスラエル創建(1948)によってユダヤ人の存在の根にあたえられる衝撃を控えていた。このような事情はなにもアメリカのユダヤ人に限ったものでないといえるが、前回述べた“Mass Immigration”の結果、世界最大のユダヤ人センターに転化していくアメリカに根をおろし始めたこの時期の彼らを抜きにしては今日に到るJewryの諸相を語れぬことも事実であろう。その背景には、第1次大戦を契機として、当初孤立主義を唱えながらも好むと好まざるとに拘らず、資本主義体制の強大国として現代世界の主導的立場につこうとしていたアメリカがあり、国内的には自動車

産業その他の部門での大量生産と都市を中心とした大量消費の到来で迎えた20年代の繁栄とその末期の急激な暗転の大恐慌、続いて社会主義的傾向の強まる30年代にあって、体制内改革といわれる一連のニューディール政策を経て第2次大戦への参加がある。

20年代に大量移住の波を止められたユダヤ系移民は、さまざまな牽引要因の働きを受けながら、この変動期にあってアメリカ社会へそれなりの定着をはかり、戦後の名実ともの発展につなげていった。ここではその(1)ゲットー (ghetto) におけるアメリカ化 (Americanization) を通しての彼らの地位向上への努力と、それに伴いようやくアメリカでも顕在化するに到った(2)反ユダヤ主義の様態、ならびにそれへの一つの対応としての(3)シオニズムに果たした役割を国際的動きとの関連で概観し、最後に当時の(4)社会・労働運動へのかかわり方をとり上げてみることにする。これらの諸項目はいずれもユダヤ系アメリカ人の生き方あるいは文化的 identity と深く結びつき、この時期の文学に際立った傾向をあたえていると思われるからだ。

(1)地位の向上とゲットーでのアメリカ化 まずこの時期以降のユダヤ移民の推移を略記すると、第1次大戦で流入の止まっていた移民の数は戦後ふたたび上昇をみせたが、折からの不況のなかで人種暴動、スト、テロの多発、さらにロシア革命とコミンテルンの創設があたえた“Red Scare”などで社会不安が昂じ、nativists (生粋のアメリカ人によるアメリカの管理を主張) や、1915年に復活した第2次KKK団の圧力の強まりで一連の移民規制法(1917, 1921, 1924各年)が可決された。特に1924年のものはその公聴会で、ニューヨークのロウアー・イースト・サイド (Lower East Side) のユダヤ人は急進的かつ un-American で善良な市民になれぬと断じ、規制方法も西・北欧に有利で東・南欧に厳しい割当制 (quota system) をとった。この結果東欧系ユダヤ移民の大波は鎮まり、その後1935年以降に緩められた移民法によりナチスに追われた学者、作家などを中心とする約15万の亡命者と、戦後10年位のあいだにまた15万人ほどのナチスの魔手から生き延びた者が入り、対総人口比は1937年の3.7%から1967年の2.92%に下り、1973年で総数約590万といわれている。

東欧系移民は財産を整理し家族をあげてやってきた場合が多く、戻るべき安全な場所もなく(帰った者は僅か2%内外で出稼ぎ根性がない)、一方で貧境を脱する意識強く、教育を通じての自己向上欲に燃えていた。彼らは先住西欧(ドイツ)系ユダヤ人の救済・援助の手を借りたり、みずからつくった同郷者の互助組織“Landsmannschaften”などで支え合いながら、手押車による露天商や既製の仕立ての下請けで食いつなぎ、貯めた小銭を仕事の拡張や子弟の教育に振り向けた。やがてアメリカの

自由な空気のなかにその才能と商魂に見合うはけ口を見出した彼らは、30年代までに資本集約度が低く知的集約度の高い新興分野に進出した——既製服メーカーや屑鉄業、仲買・通信販売等の流通部門、映画・芸能界、出版・マスコミの知識産業、さらに高等教育を受けた（当初ニューヨークではCity Collegeが圧倒的）子弟たちの競って進んだ医師・弁護士・教師の専門職などである。これに伴ってゲットーからの脱出もはかれ、ニューヨークでいえばuptown, Brooklyn, Bronx さらにQueens, Long Island方面までへの移転がみられたが、閑静な郊外暮らしは第2次大戦後に本格化したという。

こうしてゲットーはあとになってみると一時の寄留地に過ぎず、その劣悪な環境が地位向上欲に拍車をかけたともいえるが、20・30年代にはまだ移民にとって経済上のみならず政治的にも文化的にも重要な役割を担っていた。移民たちの生活様式のアメリカ化を目的に部外の有志によるセツトルメント活動もおこなわれたが、このアメリカ化ないし acculturation（文化変容）という点になると、移民自身の伝統的かつ文化的 identity にかかわる問題として彼らの反応は複雑微妙な相を呈してくる。ただ、宗教的・人種的自意識を強く持たせていた移民当初の Orthodox Judaism はすでにシュテットル (shtetl) の生活で有していた基盤を失っており、やがて精神の侵蝕が必然的に起こってきた。旧世界で萌芽のあった modernism の希求はシオニズムや社会主義のような新しい世俗的イデオロギーへつく形をとり、正統伝統を脱するわけだが、これはただちに人種的な民衆の伝統と縁を絶つことには必ずしもならない（特にシオニズムの場合）。だが当然、宗教生活をめぐって世代間の抗争ももちあがり、2世の Judaism 離れは30年代までに進み、1/3世帯以下が戒律を守っているに過ぎなかった。宗教の次にユダヤ移民を結びつけていたのは彼らの言語 Yiddish であり、それはユダヤ的価値を保持せしめアメリカでの acculturation を遅らせる一因でもあったが、これとて大きな役割を果たしていたイディッシュ語新聞などの読者が第1次大戦後減少し始め、1930年の調査では4人に1人がイディッシュを母国語というにとどまる。その他 intermarriage（異民族間結婚）の増加などによって（意識の底でユダヤ伝統は容易に放棄されなかったものの）アメリカの世俗文化が東欧の宗教・人種的文化にだんだん取ってかわっていった。ゲットーはこの意味で異文化からの衝撃の緩衝器となり、急激で無理な適応を防ぎつつ、自己の identity を保持しながら同化していく生活の場だった。そしてこれらの諸相はこの時期の realistic novels によく反映されている。

(2)反ユダヤ主義 サルトルやドイッチャーのいっているように、ある意味では離散

(Diaspora) 以後の歴史のなかでユダヤ人をユダヤ人たらしめた現象だが、これを旧来の宗教的対ユダヤ人憎悪・反感によるものと、19世紀後半からあらわれた政治イデオロギー・運動としての対人種的反セム主義とに分けるべきだという意見がある。たしかにナチスのようにはっきりとした悪夢もあれば潜在的無意識な反ユダヤ感情もあるわけだが、もともと旧来のものの上に反セム主義がつくられたともいえるので、ここではアメリカの事情も考慮してそれほどこだわらず、一般的に反ユダヤ主義としておく。

同化した西欧系にくらべ、特異な生活様式を色濃く身につけた東欧系ユダヤ移民が大量に都市に集中し、やがて社会的にも伸長し始めるようになって、アメリカにも反ユダヤ主義の風潮があらわれてくる。もともとアメリカでは移民にたいし経済的理由などでこれを歓迎する向きと、nativists のように疑惑の目を向ける場合とがあったが、19世紀半ばから相次ぐ移民の波に後者の人種的偏見がいつそう強められ、ユダヤ人については、保守的農民層、宗教的反感を持ち生活上競合する関係にあったおなじ都市居住者の下層階級（アイルランド系など）、没落した名門層がC.A. de Gobineau や H. Chamberlain などの人種論と結びついた反ユダヤ主義の煽動にのせられ、近代的に歪められたユダヤ人像をつくりあげた。例えば、国際金融資本家あるいはコミンテルンに拠る革命家として世界征覇をねらう陰謀家、祖国の裏切り者、人種的劣等者などである。すでにセリグマン事件（1877）やユダヤ商人襲撃事件（1880's）等の差別待遇や暴力事件があり、H. フォードも数年にわたって反ユダヤ宣伝をおこなった。30年代になると大恐慌による社会緊張やドイツの新体制確立とともに“Buy Christian”運動など新手の攻勢が加わり、ドイツ系アメリカ人の手で輸入されたナチスまがいのユダヤ排斥さえみられた（これは“アメリカの夢”のパロディも絡ませアメリカ・ファッションの悪夢としてN. West の *A Cool Million* (1934) などに予言的に描かれている）。しかし、帝政ロシアやナチス・ドイツの場合のように、反ユダヤ主義が国民の注意を国内問題からそらせる手段として政策的に用いられたのにたいし、アメリカではときに狂信者による刺激的で猛烈な憎悪の爆発の形をとることはあっても、公的にユダヤ人が弾圧されたことはない。またユダヤ人側もロシアで黒百人組のような国粋主義者たちの横暴を経験しており、自分たちについてでっち上げられた虚像の非合理性を充分認識していたので、西欧系ユダヤ人のようにその文化的特性の放棄と同化の促進を解決策とすることにはおいそれと応ぜず、文化的多元主義（Cultural Pluralism）を唱え、寛容とリベラリズムを強調して自己の立場を護った。

一方あからさまな迫害、非難ではないが、被害者の心情に癒しがたい傷を残す反ユ

ダヤ主義の一形態である社会的経済的差別もなかなか消えず、大学入学定員割当制や職域でのアンバランスを招いた。これらにたいしてもユダヤ人たちは各種の機関を通じて改善につとめたが、この問題は個人的にはさまざまな trauma を生み、文学作品の主要な題材を提供する。異教徒への意識から目立つことを恐れるかと思えば、逆に孤立主義に陥る。あるいは疎外感につきまとわれ、人一倍みずからのユダヤ性に敏感なあまりわれとわが身を差別し、あげくはユダヤ攻撃に転じかねないパラドックスにはまり、加害と被害の関係も微妙な陰影を帯びてくる……。ただ、文学的達成の面からいうと、反ユダヤ主義の鎮静化し、ユダヤ意識が底流化するこの期以降の作品にみるべきものがあるようだ。

(3)シオニズム 反ユダヤ主義はユダヤ人にとっていやでも自分の存在の本質に触れ、彼らの存立のあり方にかかわる問題だった。同化による解決策の対極にあるともいえる積極的対応として、シオニズムの動きが19世紀末から近代民族主義の風潮のなかで国際的に活発化し、1917年のバルフォア宣言をうけパレスチナがイギリスの委任統治下にあった(1922～1948)この時期に一段とイスラエル建国の実現をめざすことになる。東欧のユダヤ人社会にかわって比重の増したアメリカのユダヤ共同体はこれに大きな役割を果たし、文学的テーマにも強い刺激をあたえた。

もともとシオニズムは、離散が始まって以来メシアによるシオンへの回帰＝エルサレムへの帰還(Alia)願望としてユダヤ人の考えにあったが、近代シオニズムはその責任をメシアの肩からユダヤ人自身の肩に移した。このメシアニズム的発想から政治的発想への転換は1860年頃で、中世の反ユダヤ感情が近代の反ユダヤ主義に変質し始めた時期に重なり、ユダヤ人側では従属から自立への志向がなされるようになった。理論的・精神的先駆者の M. ヘスヤアハド・ハ・アムなどの提唱がなされたあと、ボグロムをきっかけにオデッサのユダヤ人医師 L. Pinsker は *Autoemanzipation* (1882) をあらわし、同化の幻想に反対した。また、ドレフュス事件の取材で衝撃を受けた T. Herzl は、*Judenstaat* (1895) でシオニズムの理念の輪郭を示すとともに、国際的シオニズム運動の組織化にのり出した。1897年開かれた第1回国際シオニスト会議で「ユダヤ人のためにパレスチナに公法上保証された領土をつくることをその目的とする」というパーゼル綱領が採択され、ここにイスラエル国実現の第一歩が踏み出された。これと併行してパレスチナ植民運動もフランスの Rothschild 家などから財政的援助を得て、先住アラブ人から荒野を買い取って開拓し、ユダヤ人居住地を築いていた。その後イギリスの中近東にたいする帝国主義的思惑に対アラブ政策も絡んで、アラブ側の反ユダヤ暴動を招くが、第2次大戦後はユダヤ側も本格的に反英、反アラ

ブ闘争に転じ、国連のパレスチナ分割案採択を経てついにイスラエル建国宣言をみるに到る。以上のような海外でのシオニズムの展開にたいしアメリカでの対応は当初低調だった。それはシオニズムも社会主義とともに移民がアメリカに持ち込んだイデオロギーの一つではあったが、集团的移民の数はパレスチナのそれをはるかにうまわり、彼らにとってはアメリカ自体がいわば現代のシオンだったからだ。しかし、第1回国際シオニスト会議以降アメリカにも全国的組織がつくれ、左は Labor Zionism から右の Revisionist Zionism までさまざまな派が生まれた。1914年には有能な指導者 L. Brandeis の参加を得て加入者、資金の増加がはかられ、運動や土地購入の援助も充実し、パリ和平交渉へ代表を派遣するなど国際的にもシオニズム推進にあたった。

シオニズム運動の高まりとともにシオニストと反ないし非シオニストとの争いも強まった。一つは西欧系ユダヤ人を中心とする同化主義の立場からの批判で、彼らは“国のなかの国”という二重忠誠の問題になると考え、シオンとなったアメリカでは経済的改善と完全な市民権の方が大事だった。一方社会主義者は社会主義の普遍的法則にそってユダヤ人問題の解決をはかろうとし、反ユダヤ主義の根も資本主義体制にあるとみる観点から万人の解放にユダヤ人のそれも入ると考え、シオニズムを反動的ブルジョアジーの民族主義として反対した。しかし、これらの反対もやがて同化ユダヤ人まで抹殺しようとした（特に西欧系にとってショックだった）ナチスの抬頭や各国の少数民族尊重の空洞化、スターリンの反ユダヤ主義を利用した粛清などによって色褪せ、ユダヤ民族伝統に基づく主権国家設立というシオニズムの理念が再認識されることになった。それでも今日なおメシアによる救済を墨守する正統派の小グループはシオニズムおよびイスラエルの存在を認めず、また、かつてシオニズムの創始者の一人で現在の中東紛争も予見していたザメンホフの場合は、ユダヤ民族の幸福は全人類の幸福のなかに見出すほかないと思ってシオニズムを離れたが、これは不幸にしてその予見が適中している現在、イスラエル建国を現代における民族国家の悲劇とみるドイッチャーの見解とも通じていよう。それはそれとして、いまやイスラエルに倍するユダヤ人口を抱えるアメリカだが、そこへの移住者は意外に少ないという、だが、精神的連帯と財政的援助により直接間接に大きい影響力を持っていることは否定できない。とりわけシオニズムの文化・精神・理念面にかかわる問題は、なんらかの形でこの時期のユダヤ系作家に明瞭あるいは微妙な陰影をあたえているのである。

(4)社会・労働運動 前項で触れたように、おなじユダヤ人問題を解決するのでも、シオニズムとはベクトルの相反する社会主義の考えは、大量移民に伴う急進的知識人

の移住でこれまたアメリカに入ったが、その下地は特に帝政ロシアの情勢でつくり出されていた。19世紀後半から各種の規制が強められ、シュテットルのようなユダヤ人の伝統的経済・文化共同体の解体が起こり、官憲の使喚によるポグロムがこれに物理的かつ心理的拍車をかけた。こうしてユダヤ人社会の窮民化とユダヤ青年層の急進化をもたらし、彼らは保持機能を失いつつあった Judaism のかわりにシオニズムとならんで社会主義に道を求めた。ところが革新陣営がポグロムに冷淡な態度をとったこともあり、ユダヤ革命派も従来のコスモポリタニズムから転換をはかり、ユダヤ人問題に目を注ぎその迫害からの解放を考えるに到る。ただ没階級的民族運動のパレスチナ志向とはらず、アメリカに農業コロニーの設立などをめざした。一方国内では、小工場の労働者と手工業職人を基盤に全ユダヤ労働者同盟（ブンド）が創立され（1897）、半ばロシア化されたインテリとイディッシュ労働大衆との結びつきによって政治的・市民的諸権利の獲得、経済的・文化的貧困からの解放が課題となる。しかし20世紀に入って民族問題綱領をめぐる内部のシオニスト系との確執が起こり、さらに民族主義的傾向を深めたブンド自身、ユダヤ人の文化的自治の権利を主張してロシア社会民主党と争うことになった。

このような背景のもとに移民してきたアメリカは、すでに機械による工業化が進み、1880年代から大恐慌にかけ何度か不況に見舞われるなかで、企業が利潤を追求する一方労働者は劣悪な労働条件のもとでストライキを繰り返していた。もともとユダヤ人社会で地位の高かった知識人たちはラビにかわり指導者として労働運動を組織し、同胞の待遇改善に取り組むだけでなく、組合を通して社会変革をもめざしたが、次第に階級闘争を尖鋭化させるより労使間の和平維持に向かい、ブンドの支部ができてロシア社会主義運動と合体はしなかった。移民自身、小商人を除けば職人（とりわけ仕立屋）だった者が多く、工場制度にはなじみ薄かったため、市中の縫製工場（いわゆる sweatshop）か自宅で前近代的労働条件をいとわず下請けするのが手っとり早い稼ぎ方だった。しかも工場の所有者が先住のユダヤ系であることが多く、両者の衝突は却って感情的となり、移民側も刻苦に耐えて向上に努め、労働運動も一代限りとなる傾向があった。その他、新移民がスト破りに使われたり、労働者や指導者同士の分裂もないわけではなかったが、東欧系ユダヤ移民にとって、社会・労働運動もまた彼らに力をあたえたことで重要なアメリカ化の媒体となつたのであり、組合などの社会・労働福祉計画は New Deal が Jew Deal といわれるくらいそのなかに採り入れられ、同化の過程を促進したのである。なお、ゲッターの惨状も彼らの目を社会的にひらかせた。文学的活動としては、とりわけ30年代にユダヤ系もその社会主義的

傾向を推進する有力な担い手の一つとなった。

(B)

(1)非ユダヤ系作家は前回にも触れたように、“Mass Immigration”前にはイギリス小説を通して入ってきたユダヤ人の stereotypes を描く傾向があったが、一方 M. Twain はじめその実状を認識して友好的な立場をとる者もいた。移民の始まった19世紀末の“muckrakers”は、ユダヤ移民のスラムや搾取工場のことを知り、また D. C. Fisher のように、その *Seasoned Timber* (1939) などで大恐慌とヒトラーの抬頭する多難な時期にユダヤ人を擁護し、彼らへの理解と共感を示した。だが、アメリカ文化へのユダヤの要素の影響をよろこばず、ユダヤ人を成り上り者とみる知識人も少なくなかった。そのなかでユダヤ人の良き理解者でジャーナリストの H. Hapgood は、Hemingway の *The Sun Also Rises* (1926) の R. Cohn の扱い方に反対し、いやな人物にユダヤ人だからという人種的要因を持ち込んだ点を衝いた。彼はユダヤ人のうちに活動力を認めており、やがて反ユダヤ主義をめぐって T. Dreiser と論争を交えることになる。この自然主義の巨匠で後年社会主義に傾倒する Dreiser も、従来の反ユダヤ的色合いに染められたユダヤ人を性的犯罪者にした小説を書いたり、ユダヤ人問題のシンポジウムを提唱したりしている。熱心なカトリック信者だったという父の影響がなんらかの形で出たのかもしれないが、ともかく彼は、ユダヤ人進出への対抗措置として彼らに領土をあたえ、各国からそこへ移すべきだという結果的にはシオニスト（ないしはいわゆる Territorialist）に近い考えを持ち、Hapgood の抗議にも、ユダヤ人が同化しようとししない以上国を造らせるか、異種族間結婚で混血させてユダヤ人問題を解消するしかないと反論してユダヤ人への反感を隠さなかった。それでもあとになって、ユダヤ人の資本家には反対だがその労働者には反対しないといったり、死の前年ナチスのユダヤ人にたいする扱いをラジオで非難するなどした。少々皮肉な話だが、彼は自分の本がドイツで発禁になったとき、彼自身ユダヤ人と思われていたのではないかと危惧したという。その他の作家では、F.S. Fitzgerald はすでにアメリカ社会の一部となったユダヤ人を描き、R. Wright は人種差別と迫害にあったその歴史への共感からか、*Native Son* (1940) で黒人の殺人犯人である主人公の弁護人に共産主義者のユダヤ人をあてたりしている。こうしてユダヤ人の現実、この時期の非ユダヤ人作家の作品でアメリカの情景の一部として反映されてはきたが、より深いところでの捉え方となると、当然のことながらユダヤ系作家をまたなければならぬ。

(2)ユダヤ系詩人と劇作家も小説家の場合のように、第1次大戦前後から英語による作品を発表し始めていたが、全般的にはユダヤ的題材をとり上げる者少なく、ゲットーの記憶から逃れて新移民の現実を反映していなかった。この逃避的態度には半ばアメリカ化した世代の姿勢に通ずるものがあるだろうが、作品としても深みに達していないといわれている。そのなかで詩人としては、却ってドイツ系ユダヤ移民の3世ですでにアメリカに定着していた Louis Untermeyer (1885~?) が叙情詩やパロディ詩の世界で活躍した。彼はいまさらアメリカ的 personality を得るために闘ったり、気負ったりする必要を認めなかったが、Jewishnessは自分に課せられた宿命として受け入れ、ユダヤ人としての共感からハイネの伝記やE.トラーの翻訳なども出している。また、20年代に小説家としても知られるようになった Robert Nathan (1894~) は、詩集 *A Winter Tide* (1940) でユダヤ人とキリスト教徒の統一を呼びかけ、現代の Baalism への抵抗を求めた。なお小説でも、各地からのユダヤ人の亡命をテーマにした *Road of Ages* (1935)、さらにイスラエル建国に触発された主人公が自らの Jewish identity を認識する *A Star in the Winter* (1962) などを発表している。

劇作家にあってもユダヤの要素の不在ないし隠蔽は顕著で、むしろ当時のイディッシュ劇場や ^{ボードビル} vaudeville (マルクス兄弟等に代表される) にはっきりしたユダヤ的イメージがみられ、例えばロシア生まれで1899年にアメリカへきたイディッシュ劇作家・小説家の David Pinski などの翻訳劇に人々は Jewish life を求めたといわれる。こういう状況のなかで大都市の移民の経験を活写し、30年代の社会問題も織り込んで一つの芸術的達成をみせたのがフィラデルフィア生まれの Clifford Odets (1906~1963) である。特にその *Awake and Sing* (1935) で、大不況下ナチスの脅威や戦争の予感にとりまかれたユダヤ人中産階級の家庭の苦闘を通し、物質主義的社会の奔流にめげずなお理想を求める姿勢(とりわけ孫の自立のため身を捨てる祖父にあらわれている)を描いており、ユダヤの要素や型通りの主義主張がそれほど前面に出ていないだけ却って当時のリアリティを捉え得たといえるかもしれない。

(3)ユダヤ系小説家 両大戦間の都市を中心としたアメリカの現実と同化の力がユダヤの本質を徐々に変色させ侵蝕していくなかで、Jewish life は複雑さを増し、さまざまな歪みを呈するようになる。それは特に第2世代の者(扱う作家も殆どが世紀の交り10年前後の生まれ)の情緒的・精神的な不安定、理想の挫折、喪失感、疎隔感、不協和感、脆さ、倫理性の衰退、自己嫌悪や憎悪、シニズムなどとしてこの時期の現実主義的小説に捉えられているが、一方稀薄化するユダヤ意識と反ユダヤ主義の風潮の強まりにたいする反応から、自己存立の場の確認を求めてシオニズムや古来の伝

統につくか、逆に Judaism の固陋な考えや忌まわしきから離れ、またはそれを超えようと革命的急進主義志向をとる者も出てくる。ここでは記述の都合上 2、3 のセクションに分けて扱うが、もちろん全部が全部画然としたものではない。トーンの強弱はあれ、いずれも変容するユダヤ的現実の側面であり、作家によっては Jewishness をめぐって深部に混在ないし併存する要素を抱えている場合も多々みられるからだ。

i) **Acculturation(その諸相)**：ユダヤ的要素からの逃避、いい換えれば前の世代の保持する過去から逃れたいという願望は、裏返せばアメリカ社会への積極的適応で、イディッシュなまりのない英語の修得、ユダヤ教の規制に掟われぬ生活様式、Anglo-American への志向、それらこそ (A) で述べたように (特に若い世代にとって) 切実な生活上の要請でもあった。この辺の事情は Alfred Kazin (1915～) の *A Walker in the City* (1951) などをはじめとする文学的記録類にもうかがえるが、一方旧来の文化風土から離れる過程で根が傷つき成育を損われる危険も出てきた。前述した D. Pinski は *The House of Noah Eden* (1929) でリスアニアから 1880 年代に移民してきた一家を題材に、1 世は困難ななかでも伝統的生活を維持するが、2 世は“golden opportunities”に恵まれる反面危険な誘惑の満ちたなかで育ち、神や祖父の世界から離されて絶望と自滅の道を迎える様相を描いた。おなじくルーマニアのユダヤ人一家でアメリカに移民した場合をとり上げた Myron Brinig は、その *Singermann* (1929) で両親の権威から離反していく子供たちの Jewish decay を示した。このような第 2 世代の生き方にたいし、たんにノスタルジアや感傷からだけでなく、アメリカのユダヤの未来における主要な基盤として過去の遺産への記憶の必要を薦めるのが Charles Angoff (1902～) などである。Angoff は 20 年代に雑誌編集から文学的出発をし、50 年代以降東欧系ユダヤ移民家族の連作形式による年代記を発表しているが、彼のテーマはアメリカでいかにしてユダヤ人たり得るかである。作品としてはあとになるが内容的な関連から簡単に触れておこう。作者は、このボストンへやってきた典型的移民一家 Polonskys の 20 世紀初頭から 50 年間にわたるアメリカでの acculturation を迎える大河的連作で、語り手の少年 David の成長に伴う年代の流れを反映させながら、一家の推移、反ユダヤ主義問題、異種族間結婚等々を絡めて、歴史的遺産への繋りを弱めず、またアメリカの遺産の富も捨てないでいく道を模索していく。その底にはアメリカへの期待とともに、ユダヤ共同体の再生力にたいする楽天的ともいえる信頼があるようだ。

同化をめぐる危険や緊張を意識的に扱うというより、青少年期の目を通してその困窮時からの経験（これはとりもなおさずアメリカ化の過程でもある）の記憶を主として naturalistic detail のうちに再現したのが Daniel Fuchs (1909～), Myer Levin

(1905～)、そしてその特異なスタイルで今日の文学的再評価を招いた Henry Roth (1906～) たちである。Fuchs はブルックリンのウィリアムズバーグ地区 (19世紀末以来狭隘となったロウアー・イースト・サイドからユダヤ系移民などが転住し始め、次々にアパートが建てられていき、作者も5歳で移る) を中心とした Jewish life を、ウィリアムズバーグ3部作といわれる *Summer in Williamsburg* (1934), *Homage to Blenholt* (1936), *Low Company* (1937) (これらは1961年に1巻本として再刊) に描いた。公平な、なにものにも煩わされることのない明確な目でその様相の一切をみつめようとの意図³¹から、当時の東欧系ユダヤ人の第1、第2世代の困苦、希求の姿が捉えられている、ささやかな利益をめぐる小企業同士の争い、人生苦からの自殺未遂、労働者政党のキャンペーン、火事による焼死、殺人、古い慣習と新しいそれとのギャップ……。作者は登場人物の一人である大学生の Philip を通して、これら生起しては消え、あるいは忘れ去られていく事象のなかに人生のリアリティを見出そうとしているかのようだ³²。そしてそこには、とりわけて烈しいユダヤ的トーンが響いているわけではないが、寄宿先で自分をアウトサイダーと感じる Philip に、良家の子女の集まるマディソン街のパーティーで次のような気持ちを抱かせる、「……, but it was true that he (=Philip) could not match their background, that he could not meet them on their own ground. He felt uncomfortable before them, as if he were an imposter. When he had to mention that he attended City College or that he lived in Williamsburg, he always flinched at their considerate acknowledgment.³³」また彼は、正統派的ではなくとも静謐な金曜の夜を守る自分の家庭に心の安らぎを覚え、いくら買手であろうと値打ちのない店を売るのは詐欺行為だと拒否し続ける父を畏敬し、墓場の祈禱師の教えを賢者の知恵として心に留めようとする。筆致も基調はリアリズムにありながらときにファンタスティックな描写を交え、愚者 schlemiel 的人物 (Cohen) を配し、ユダヤ的ジョークを織り込むなどイディッシュ文学との繋りもうかがわれる。この点 A. Guttman の指摘する S. Aleichem との関連³⁴は注目されていい。

第2世代の軽薄なアメリカ化については、すでに前回とり上げた S. Ornitz のように自伝体をとった作品もあるが、M. Levin は生地シカゴのウエスト・サイドの若者たちのグループ (男女合わせて約20名) をすぐれた“period portrait”といわれる *The Old Bunch* (1937) で扱った。どちらかというと日常生活の雰囲気漂わす Fuchs にたいし、彼はグループの成員の高校卒後の成長を1921年から1934年までのあらゆる社会制度・活動 (市政と事業、流通機構、裁判所の機能、救済事業、医療機関、不景

気、シオニズム、コミュニズム、ストライキ、デモ、警察の弾圧等々）とのかかわりのうちに、時・空のパノラミックな語り口で描き出している。“Jazz Age”とも“Roaring Twenties”とも呼ばれる狂燥と繁栄の時代と、その直後の大不況とニューディール政策下にあって、これらユダヤ人の2世たちは伝統の重荷を捨ててそれぞれ自分のやりたいことをやり、障害につまづきながらもより良い生活をめざす。医者、弁護士、芸術家、教師、不動産屋、それに競輪選手や“dirty business”まで手を出す者もあらわれ、アメリカの競走原理を良しとしてそれに従う彼らはもはや立派な *native sons & daughters* であるかにみえる（事実この小説出版当時はユダヤ人社会で不評だったという）、……だが、産をなした親でさえ形式的なものと思っている金曜の夜の一族の会合に出席し、ドイツ系ユダヤ人の亡命者のパレスチナ行きには金を出す。なかでも芸術を志し、自分の存在意義を高めてくれるものを求めてパリやパレスチナに赴く Joe Freedman は、援助を乞いにロシアからやってきた者を囲んで話されるイディッシュ語が、やがて“おかしな”言語でなく自尊心ある国民の言葉となるのを感じ、さらにパレスチナ入植者への募金行事のため広大なスタジアムへ集まった群衆の熱狂に包まれる——「The whole pageant was rushing through Joe's blood, all his life, and the life of the race that made him. He recalled his own journey, seeking and seeking, going backward on the trail that the Jews had traveled, to Poland, to Bialystok, and then he had had to go again, to Palestine. Now, here, it added up.⁵³」

この Joe の姿勢は作者のそれに通じており、Levin はすでにパレスチナへ行き（1925）、ユダヤ人であることの恐れや恥を払拭するとともに Jewishness の複雑性に気づき、再度その地にひかれてキブツに入っている。1929年帰国した彼は自己の内なる二つの魂の疑問にぶつかる、すなわち Americanism と Jewishness にかかわるもので、そこから自分はアメリカ人かユダヤ人か、人は同時に両者であり得るかという彼の主要なテーマが出てくる。1931年にはアメリカで最初の重要なシオニスト小説といわれる *Yehuda*（キブツを舞台とする）を書き、さらにその翌年彼が通曉していたハンディズムの世界についての物語集 *The Golden Mountain* を出している。それから一転して現実主義的記録風の *The Old Bunch* を発表したわけだが、彼は以後またもや10年にわたって従軍記者として強制収容所やイスラエルの独立闘争を目撃し、その後も彼の biculturalism の立場を象徴するかのように、ニューヨークとイスラエル交互の生活を続けているというが、Jewishnessは彼にとって宗教的証し नाहीしは社会的証しというよりユダヤの民への帰属感であり、ハンディズムの神秘的要素へ

の反応だともみられている。それにしても Levin は、*The Old Bunch* の主要人物の一人を主人公とした *Citizens* (1940) で、鉄鋼工場での警官による労働者射殺事件を題材に、いわゆるプロレタリア的作品をも手がけ、その小説家としての関心はきわめて多岐にわたっている。

Fuchs や Levin が Jewish scene を時・空および人的繋りにおいてやや広く、どちらかといえば即対象的に写しとったのにたいし、オーストリアからきた Henry Roth は、6歳頃から約2年間にわたる少年の目を通し、ニューヨークの移民のスラムの緊張をはらんだ家庭と危険の潜む子供の世界を狭い範囲ながら重層心理的深さをもって結びつけ、前記2者とは趣きを異にするこの期の傑作 *Call It Sleep* (1934) を書いた。この作品を大学卒業直後に着手して発表した著者は、これまで数篇の短篇を諸雑誌に載せたきりで、水禽の飼育農場などに引き籠り沈黙を守っているが、この小説自体は、出版当初かなりの好評を受けながらその後一般には久しく忘れられていたのを、50年代後半 A. Kazin や L. Fiedler による再評価が起こり、また C. Angoff の仲介などもあって、ユダヤ系文学の隆盛に伴い再版され(ペーパーバック版、1962) 今日移民文学の最も主要な古典として定着をみている。

作者の少年期の思い出をもとにしたと思われるこの長編(あくまでも表面的比較だが、設定の面で後出の M. Gold の *Jews Without Money* と共通したところもみられる)の主人公 David Schearl は、2歳足らずで先に渡米していた父のあとを追って母とニューヨークにやってくる。プロローグで印象的に描かれる出迎え風景にはやくも David の今後の生活を支配する emotional pattern が規定されている。すでにアメリカの現実に触れて疎隔感に悩まされ、偏執的自負にとり憑かれている父は、素朴に“Golden Land”のアメリカを夢みてやってきた母と再会早々行き違い、Davidのかぶっていた故郷の乳母の贈り物である青色の麦藁帽をアメリカ風にそぐわないと投げ捨て彼をおびえさせるのだ。心優しい母親も英語がよく分からず、夫にあたられ孤絶するなかで愛情は息子に注がれ、Davidにとっても母が避難所になる。そしてなにかにつけ主人公に癡癡をぶつける父、ここにはまさにフロイト的 oedipal situation がある。移民の父子にある世代間の衝突というには息子はあまりにも幼く、父親自身衝突するのはアメリカの現実であり、彼はそれに適応できずにフラストレーションを起こしているのだ。一方 David は彼なりに外部世界の混沌と恐怖に直面させられる——ねずみのはびこる地下室の暗闇、薄暗く不気味な階段、足の悪い少女による性的悪戯、母を狙う父の職場の同郷人、父の子でないという疑念、ヘブライ語学校での混乱と年長者の授業で耳にしたイザヤの幻影に出てくる燃える石炭の話、そして不良

少年と市街電車の軌道、禁じられたロザリオ……。それら内外から迫りくる一切のケイオスに対応しようと、不安の充電した主人公は牛乳用杓子の金属の柄をレールに差し込む。彼を貫く閃光は彼にとっての救済であり、求めていた自信の力であった。足を火傷して横たわっている David に母が眠いのかとたずねると彼はうなづきながらぼんやりと思い描く、「He might as well call it sleep. It was only toward sleep that every wink of the eyelids could strike a spark into the cloudy tinder of the dark, kindle out of shadowy corners of the bedroom such myriad and such vivid jets of images..... It was only toward sleep that ears had power to cull again and reassemble the shrill cry, the hoarse voice, the scream of fear,..... It was only toward sleep one knew himself still lying on the cobbles, felt the cobbles under him,.....⁶⁾」

たしかにこの作品も、ユダヤ移民の子供の目を通して見たアメリカの錯雑した現実とその体験を描き、母と息子の結びつきのような典型的パターンもみられる（この点 Jewish mother の prototype の創始とされる）が、それは副次的要素であり、たんに移民文学の古典にとどまらず、この時期の大きな文学的達成の一つとして再評価されている点も見逃せないだろう。発表当時はその文学的風潮も手伝い、J.T. Farrell 風の素材、都市の貧困描写やプロパガンダのコラージュ的挿入などの点でプロレタリア小説として扱われる向きもあったようだが、主要人物像、手法からいっていまとなつては一面的な評断とされている。フロイト理論のほか、第4部第21章等にみられるように James Joyce の影響も無視できず、ナレーション、家庭のイディッシュ（明晰な英語表現に換えられているが）、街なかの混迷を伝えるかのような訛りでごったまぜになった英語、cheder のヘブライ語といった言葉の領域の配慮もされている。Walter Allen によれば「Roth はわれわれを子供の心に直入させ、……子供の magical thinking といわれるもの——詩人の考えに密接しているものを捉える。……その世界は詩人のひたむきで衝動的な想像力によってつくり出されている⁷⁾」とし、おなじベーパーバック版の扉で A. Kazin は、「*Call It Sleep* is one of those rare novels that unite the indistinct inner world and the external world of brutal fact into a single composition made lyrical by its intense truthfulness alone.」と端的に的をいっている。いずれにせよこの小説はイデオロギーのために Jewishness を超え出ようとしたのではなく、まさにその文学的熟成のゆえに Jewishness の枠を抜けてアメリカ文学の遺産の一つになり得たのであり、いってみればユダヤ系移民による輝かしい文学的モニュメントとなっているのだ。

積極的適応・同化は一つの帰結として当然 Jewishness の意識的抹殺・消去へ通じ、伝統の棄却、親の世代への反逆からアメリカにおける世俗的価値の追求へ走らせることになる。そして当時の“American Dream”とユダヤ移民の地位向上の機会は多かれ少なかれそれを可能ならしめていた。逆に Jewishness 側についてこれをみれば、その identity が根こぎにされるか、帰るべき家の喪失であって、反ユダヤ主義の風潮が強まれば、相手からの非難・憎悪をわれとわが身（同胞も含め）へ向け、Judaism の旧弊打破の蔭に反転の心理的機制が働いていないとは限らない。その結果醜惡なユダヤ人像（予兆は Pinski や Brinig などの作品にみられた）が、いずれもニューヨーク生まれの代表的ユダヤ系作家二人によって描かれることになった。これには20年代来のアメリカ自然主義文学の手法が影響をあたえているとも考えられ、さらに形をかえて現代の P. Roth などにも繋がる問題であろう。

その一人は“hard-boiled”のジャーナリストとして出発し、20年代にシカゴ派とも交わって小説、劇、映画等の諸分野で活躍した Ben Hect (1894~1964) である。彼は特にその小説 *A Jew in Love* (1931) で、巨額の金を株で儲け貧しいユダヤ人の世界を脱け出した主人公を設定し、ユダヤ系や非ユダヤ系の女たちとの情事に明け暮れる快楽追求に向かわせる。主人公はまず自らのユダヤ人としての非人的生まれを恥ずことを率直に認め、病的なユダヤ意識を捨ててコスモポリタニズムを誇りに思い、徹底したエゴイストで非抑圧的快楽主義者となるのである。このようなユダヤ意識への批判・攻撃とユダヤ人主人公の醜惡さを剔抉した Hect であったが、ヒトラーの迫害の募る30年代後半になって、彼は Jewishness の逃れようのないことに直面させられ、それまでの立場から正反対の極である Jewish self-assertiveness へ劇的に転回する。まさにそれは彼にとって一種の改宗であった。1941年の *My Thibe Is Called Israel* と題したコラムの論文で、ユダヤ意識のないアメリカのユダヤ人にユダヤ人の権利とその価値を護るよう立ち上がれと呼びかける。さらに彼自身積極的なシオニズムのスポークスマンとして Irgun (パレスチナのユダヤの軍事的地下組織) の資金援助をおこない、好戦的書物や善良なユダヤ人についての短篇などを出した。しかし、上述の論文とならんで彼の religious chauvinism をよく示すといわれる *The Lost Tribe* には10余年にわたる支援活動で味わった苦さもまたこめられている。彼はそのなかで、ナチスの残虐行為にたいし非同化のユダヤ人は嘆きと祈りと仲間内での呪いの言葉に終始し、同化のユダヤ人も大戦を“ユダヤの戦争”にとられまいとする思惑から有力者たちは沈黙していたことを衝いたが、一方自分の言論活動の空しさ、ユダヤ人救済というユダヤの大義はなんであったかを自問し、結局それはユダヤ人への愛

から出たことに思いあたる。それだけに失われた者への悲しみと、回復すべきでたてのなさからくる心の傷痕はともに深い。そして自分の今後についてこう述べる、「I would go back to being an American, full of American pride and victory. There would remain a small, private area of defeat in me called Jew. On the Jewish holy days that I never had observed before, I would make certain observances now. I would remember that all the people to whom, in a curious way, I belonged had been slaughtered and that they had been too lowly a people for the world to regret. And too spiritless a people to raise a fist or a gun against their enemies.⁸⁾」ただ孤立無援で戦ったワルシャワ・ゲットーのユダヤ人だけは“the little souvenir of Jewish pride that glinted in Europe's garbage can”とする。こうした挫折感やテル・アヴィヴで起こった船の爆沈事件を機に、彼はふたたび非ユダヤ志向へと戻っていった。

厚顔な衣料産業界のユダヤ人企業家 Harry Bogen の像は、天性の物語作家とされる Jerome Weidman (1913～) の手でその処女作 *I Can Get It for You Wholesale* (1937) のなかに刻まれた。主人公は配達員にストをおこなわせる裏で業者へ配達サービスをし、それで儲けた金をもとに今度は一流会社の花形デザイナーを言葉巧みに引き抜き、彼をパートナーとして自ら衣料会社を設立する。やがてその共同出資者に税金対策と称して無理やり開かせた口座へ会社の金を落し自分が流用、破産裁判になるとパートナーの妻への誓言もかえりみず、相手にすべてを押しつけて恬として恥じない。Harry はやもめの母にたいする愛情を失わず（ここにも母と息子の結びつきのパターンがみられ、作中一つの救いになっている）、食うか食われるかの仕事を忘れさせ自分に人間らしさを取り戻してくれる家の大切さを強調はするが、その母が選んだユダヤ人の娘をあまりにもユダヤ臭いと避けたため、母から自分もそのブロンクス出のユダヤ人ではないかと面罵されるのだ。それでも、亡父の希望として母の薦める法律家への道には目もくれず、この成り上りの青年実業家はダイヤモンドの腕輪で舞台女優の歓心を買ひ、おのれの出世ぶりに鼻をうごめかす。おなじ衣料業界の出世物語りで、東欧系移民の初期の代表作として触れた A. Cahan の *The Rise of David Levinsky* では、タルムードを学んで渡米してきた主人公は彼のパートナーにどこまでも忠実だった。その次代版ともいえるこの小説のアメリカ生まれの anti-hero にあっては、倫理の衰退はおおむねない。ただ当時の作品としてみれば、S. Lewis ばりの社会戯画化の線にあり、下剤的効用があるともいわれる⁹⁾。

作者はすぐ続編 *What's in It for Me?* (1938) を出したが、さすがに折からナチ

ス進出期とあってユダヤ人社会の警告を受け、誤解を避けるため増版は取り止めている。しかし、このユダヤ系作家みずからによる醜惡なユダヤ人像は、40年代に入って映画産業界の Harry ともいふべき Sammy (B. Schulberg: *What Makes Sammy Run?* の主人公) のハリウッドでのしたたかな生き方に引き継がれていく。そのおなじハリウッドを自己喪失の白昼夢のうちに描いた *The Day of the Locust* (1939) の Nathanael West (本名 Nathan Wallenstein Weinstein; 1903~40) もユダヤ系の出身だが、自己嫌惡を内攻させた彼のユダヤ的要素は表面化されず、超現実主義的作風を通じて30年代の暗鬱な社会にからめ取られる人間存在の不安のなかに、疎外される者の気質として感得されるといえる。

ii) **Jewishness の肯定 (シオニズム志向)**: Harry にみるように同化もここまでくれば本格化し、その俗惡さ、惡徳ぶりも物質的アメリカ主義に染まったものだけに、ユダヤ的なものの影など消え失せたはずだが、なぜか浮き上がってくるのは人間あるいはアメリカ人としてのでなく、ユダヤ人の醜惡な像なのだ。どうやら醜惡さにも、いやそれゆえにこそ偏見がつきまとうものらしい。Jewishness の消去どころか反ユダヤ主義の火の手に油を注ぎかねないこの自己嫌惡・憎惡によるユダヤ性否定は、それ自体反ユダヤ主義にたいする一つの心理的対応ないし情緒的発散ではあっても所詮自虐の袋小路であり、自滅への道にほかならぬ。事の本質はこれほど極端でなくともかわらない——たとえなにがしかのアメリカの夢がかない、ゲッソーの同胞に背を向けて郊外へ出ていっても、先住のキリスト教徒たちに受け入れてもらえず、ユダヤの劣等感に身をさいなまれながらよって立つ基盤を持たずに空しく同化を求める者は生ける屍である。したがって真の生、自己の回復は、同胞を含めての自己否定から自己尊重へ目を転じ、ユダヤの民の生活と意識の根に戻ることにある。この考えは当然シオニズムとのかかわりをも生ずることになるが、そのパイオニア的かつ代表的作家として、自分自身同化の幻想を根底から破られた Ludwig Lewisohn (1882~1955) がいる。

ベルリンで生まれた Lewisohn は7歳の時南カロライナに一家とともに移住し、初めはそのドイツ的背景や Judaism と離れ、一時キリスト教へ傾いたほどだが、やがて大学時代に懷疑主義に陥り formal religion を棄てた。彼は英文学を熱愛し、コロンビア大学のマスター位を優秀な成績でとったが、そのあと特別研究員奨学金を断られ結局大学を去らざるを得なくなる。いかにアメリカに同化しキーツやシェリーを愛していても、ドイツ系ユダヤ人はアングロ・サクソン伝統によるアメリカの大学の英文科では歓迎されないことを知って衝撃を受けた彼は、初期の自伝 *Upstream*

(1922)で当時の傷心ぶりを回想しその後の方向を次のように暗示している、「A numbness held my soul and mutely I watched life, like a dream pageant, float by me……I ate nothing till evening when I went into a bakery and, catching sight of myself in a mirror, noted with dull objectivity my dark hair, my melancholy eyes, my unmistakably Semitic nose……An outcast……A sentence arose in my mind which I have remembered and used ever since. So long as there is discrimination, there is exile. And for the first time in my life my heart turned with grief and remorse to the thought of my brethren in exile all over the world.¹⁰⁾」アメリカ民主主義の支柱ともいべき大学人の裏切りで（彼がやっと大学——ブランドイス大・英文科に迎えられたのは60歳を過ぎた晩年になってからだった）、彼は自分を“ユダヤ人の宿命”のアメリカでの象徴と考え、雑誌編集者やドイツ文学の教師として文学批評・論文を発表するかたわら、同化から生ずる個人問題をテーマにいくつかの小説を書いた。

なかでも彼はその代表作といわれる *The Island Within* (1928) で、異種族間結婚の崩壊を通して、アメリカの夢も同化も幻影に過ぎず、ユダヤ人が同化主義の泥沼から脱出し生き延びていくには、彼ら自身の土地——パレスチナで国民的再生を達成すべきだという作者の信条をもっとも感動的にまた説得力をもって描いた。代を追うごとにユダヤ意識の薄れていく Levy 家の男子としてアメリカに生まれた Arthur は、もはやユダヤ人の自覚を少しも持たずに育つ。精神分析医となった彼は、男女同権論者で通俗雑誌に心理的な随筆も書くが性的には抑圧された異教徒の女（shikse）と結婚し、彼女ともどもパーティーの続く生活を送るうち、いわゆる American life そのもののばからしさを痛感するようになる。主人公は妻との異和感も募ってついに離婚するが、それは同時にユダヤ人としての主体性にたいする目覚めの過程でもあった。妻と話し合うなかで彼は自分の立場を次のようにいう、「I only know that I seem to be living in a void. And it seems to me more and more as though many Jews are living in a void. Now what they do is to settle down and establish a real home in the quite old-fashioned sense and cling to that and so shut out the sense of emptiness and of not belonging anywhere.¹¹⁾」彼の扱っている同化したユダヤ人の患者の精神的苦痛はすべて“flight from obscure reality”からのもので、足下に地なく頭上にも天空を望めない状態であり、仲間の知識人たちにも彼ら自身のものが欠落し、戻るべき中心を持っていないのだ。ボストンの反ユダヤ感情のなかで暮らしながら同胞を嫌っている妹の周囲にも奇妙な空虚さがあった。主人公にとっ

て、離婚はそのような同化に捉われたユダヤ人という偽りの自己からの離別であり、彼は自分の遠い過去に触れることで自由になる。ユダヤ人迫害についての古文書を見た彼は、反ユダヤ主義の根絶しがたいことを確信し、彼の民族と運命をともにしようとバルカン半島に住むユダヤ人の間に入って慈善事業に従事するのだ。Lewisohn はその後も同化の危険性を指摘して文化的多元主義さえ拒否し、第2番目の自伝 *Mid-Channel* (1929)で、「彼の属していた歴史的・人種的伝統と彼の全意識の再統合」を述べてユダヤ人としての正真性の回復を訴え、さらに、ユダヤ人が民族たることの深い意識からシオニズムが再生し、それはイスラエルの復活のみならず非ユダヤ人にとっての光ともなると主張した。論議を呼んだ著作活動も後年その特異性のため無視されたが、世間（特に同化主義者）は、ナチスの暴虐によって強いしっぺ返しを受けることになった。

ルーマニアの生まれ(1895)で、少年時代をマンチェスターに送り、1914年以降ニューヨークへ移った Maurice Samuel は Lewisohn の同盟者ともいえる存在で、アメリカでシオニストの考えを最もわかりやすく一般化した作家とされている。彼も自伝 *The Gentleman and Jew* (1950)によれば、ユダヤ的遺産に回帰した一人だが、それは、ユダヤとアングロ・アメリカ両文化の均衡をはかろうとしてやがてそのなかに潜む危険に気づき、たえざる再検討に迫られたからだった。反ユダヤ主義はユダヤ人問題でなく、異教徒の魂の苦悩であり強迫観念であって、論理で解決できるものではない、ユダヤ人はユダヤ人として生まれ自己を保持してきたのだという結論に達した彼は、従来人間についての理想を異教徒が力(競走)の原理によらしめていたのを、ユダヤ人の倫理(協同)の原理によらせることによって人間性への橋とするよう説いた。その後彼はバルフォア宣言から建国までシオニズムのため献身(10年間パレスチナに居留)し、アメリカのユダヤ人も建国を助けるだけでなく、アメリカや西欧にイスラエルでふたたび築かれる“moral form of life”のメッセージをもたらすことができると鼓吹した。このようなメシアニズムをユダヤ人の再生とその存続の最終目標として強調したのは、Lewisohn とおなじくドイツ系ではじめはユダヤ意識を持たず、20・30年代に文学的急進派・理想主義者として特にスペイン、南米問題にかかわった Waldo Frank (1889~1967)だった。彼は40年代に入って *The Jew in Our Day* でユダヤ共同体に積極的に関係しない無気力なユダヤ人の同化主義的傾向を攻撃し、*Bridgehead* (1957)では倫理的原則の具体化をうたい、イスラエルが正義、慈悲、愛を通しての世界救済の橋頭堡たらねばならないとした。

iii) Jewishness の超脱(急進主義志向): アメリカの現実によって否や応なく失

われていく伝統の価値をむしろ良しとして、いわば反ユダヤ主義を消滅させるのには Jewishness そのものをなくすことを必要とする考えがあらわれてきた。ソビエト革命時のユダヤ人問題にみられるように、これには同化主義的立場が含まれるといえるが、少なくともブルジョアのキリスト教中流・上流階級へのそれでないことは確かで、没階級かつ超民族主義的という意味では i)、ii) の場合と背馳するものだ。そのメシア伝統（予言者たちの正義の夢）、古代ユダヤの共和主義的考え方とのかかわりも指摘されるが、より現代的には革命という世俗の信仰への改宗であり、アメリカでの劣悪な生活・労働条件と反ユダヤ感情による人種的偏見との二重の疎外状況からの再生だった——つまりアメリカの現実と Jewishness のその両者の否定であったわけだ。下地は前世紀末以来イディッシュを媒介に急進的ジャーナリストの A. Cahan などによってつくられ、20世紀に入ると英語による活動、著作も盛んになった。20・30年代におけるそのユダヤ系の代表的人物で、アメリカ・プロレタリア文芸運動の主要な指導者として創作、理論面で活躍したのが Michael Gold（本名 Irving Granich；1893～1967）である。

彼は東欧系移民を両親としてニューヨークに生まれ、小卒後町工場などを転々とするうち第1次大戦直前政治的に目覚め、「The New Masses」などの編集者として政治的エッセイを書き、30年代には共産党の主だったスポークスマンとして活動する一方で創作を発表した。その立場は硬直的で複雑性に欠けるとされているが、はじめてプロレタリア文学の明確な定義づけをしたといわれ、その代表作 *Jews Without Money* (1930) はプロレタリア小説のモデルと目された。この15ヵ国語に翻訳された自伝的小説は、おなじニューヨークのゲットーを舞台としながら H. Roth の場合と違い、芸術家の自意識を交えず、そこの Jewish life を簡潔なスタイルで時には詩的雰囲気も漂わせて、語り手である子供の目を通して忠実に反映している。いわゆる筋立てらしいものはなく、トピックごとに一連のスケッチで綴った回想録とでもいうべきか、娼婦の生態、子供たちの遊び、家での集い、誕生日や祭日の行事、夏の夜の寝ぐらゐり、ハシッドの異様な世界、大家の強欲ぶり、ラビのうさんくささ……などが荒海のように怒号し、花火のように炸裂し、興奮と埃と喧嘩と混乱の渦にわきかえるゲットーの生活を色どる。そしてなによりも、病氣と飢と貧困のもたらす悲惨さがアパートの店立て、差し押え、行き倒れの場面に押えた筆致で描かれているところにこの小説の潜在的な説得力を感じさせる。病いのため昔の夢の再現もままならずバナナを売る主人公の父がぼやくように、或る者には一身代つくるのに訳ないともいえるアメリカだが、一方搾取工場や淫売屋、タマニーホール（19世紀後半からニューヨーク市

政を牛耳った民主党の一派の本拠) が待ち受け、ピストル騒ぎやキリスト教徒の瀆神の生活に交って暮らさざるを得ないのもアメリカの現実だった。ユダヤの移民たちはこれを受け入れたうえで、なお救済機関をその世話になる者の品位を失墜させ、人間としてのあらゆる資格を必ず奪うものと憎み、良心的な医者には彼ら移民の病氣は薬では癒らず、十分な生活を保障させるため労組へ入れと薦める。そして、いまだに故郷の農民気質を持ち続け、窮乏のなかにあっても家庭や同胞の世話だけでなく、キリスト教徒にまで献身的で働き者の母に断ちがたい絆を感じている主人公は、彼女に不孝とならぬよう貧乏人に忠実たることを誓う、彼らにいつくしみ深くなければならぬのは母の教えだからだ。その母親が幼い娘に交通事故で死なれ憂鬱に陥り、父も半病人の状態のなかで、主人公は差別待遇に追われ仕事を渡り歩きながらそれでも救世主を信じている。そしてその救世主は或る日イースト・サイドの街頭演説で一人の男の告げた「貧困一掃のための世界的運動の開始」宣言となって出現した。少年は耳を傾けて思う、「O workers' Revolution, you brought hope to me, a lonely, suicidal boy. You are the true Messiah. You will destroy the East Side when you come, and build there a garden for the human spirit.¹²⁾」これとともに Jewishness を超え、無階級社会をめざす一人の急進的文学イデオログが誕生したのである。

Gold より比較的若い作家としては、生地シカゴの経験を基にした Albert Halper (1904～) がおり、彼はスタイルはともかく、豊富な naturalistic detail と力強さをもって貧しい人々を描いて各国に紹介もされた。初期の30年代の作品に *The Foundry* (1934) や *The Chute* (1937) などがあるが、いずれも工場や会社の体制の軸にはめ込まれた歯車として苛酷な労働条件のもとにある労働者の人間性の回復・解放を訴える。それには祖父たちの Jewishness ではだめで、人種を超えた連帯＝組合による闘いが必要だとする。作者も自らをユダヤ系作家とみず、ありのままをとり上げただけというが、*Sons of Fathers* (1940) になると Jewish scene を無視せず、その歴史的豊かさに気づき、祖父たちの悲惨と栄光へ思いを馳せるようになる。Isidor Schneider は、イースト・サイドとハーレムで育った感受性の強い少年の成長を中心とした一種の自伝的教養小説（その意味で *Jews Without Money* の線にある）*From the Kingdom of Necessity* (1935) で、ユダヤの宗教的遺産に判批の目を向けさせるが、愛と文壇での成功が手に入っても帰属感が持てず、窮乏の王国から脱出できぬ主人公は、結局彼の元の階級に戻らざるを得ず、その一般大衆とともに Kingdom of Freedom への抗しがたい動きに加わるしかないと悟る。また、ボストン生まれではやくから孤児となり、雑多な職業についてそれらを小説の材料とした Edward Dahl-

berg は、物語体小説 *Those Who Perish* (1934) でアメリカのユダヤ人にたいする反動勢力の抬頭と影響を扱ったが、Jewishness を抜け切れなかったといわれている。

こうして“Red” Decade あるいは Popular Front のそれといわれる30年代に、プロレタリアの大義はユダヤ系のみならず他のアメリカ作家（例えば J. Dos Passos, J. Steinbeck, J.T. Farrell, R. Wright 等）も引きつけ、10年間で少なくとも70冊ものプロレタリア小説があらわれたといわれるが¹³⁾、スターリン体制下の独・ソ不可侵条約（1939）による共産主義への幻滅や、大不況の鎮静化と第2次大戦の勃発などで、運動としてのプロレタリア文芸の創造は終りを告げる。M. Gold などその影響がやがて薄れていき、いまふりかえるとその作品・言説は当時の時事性を超えるもの少なく、興味の領域も狭いとされる。それだけに作者のメシア的使命が目立ち、作品もゲットーのユダヤ的心情、場面を克明に伝える追憶がいっそう色濃くなり、イデオロギーよりも強い感動をあたえる結果となっているのは、Jewishness を超えようとした彼の立場に照らすと皮肉なことかもしれない。そこには金がないかわりに、母と息子の関係をはじめ、さまざまなユダヤ人の生身身のぶつかり合いがゲットーの喧噪のなかに浮かんでくるのだ。

この時期は大量移民によって“Melting Pot”にとび込んで生じた衝撃が、その坩堝のなか（アメリカの社会機構内部）でのぶつかり合いにかかわっていく。当初ボグロムを逃れたユダヤ移民にとって、精神的にも経済的にも“黄金の土地”と思われたアメリカは憧れの対象であるとともに、一方では新参者としてのハンディキャップのため挫折感と悔恨を醸成し、アメリカ的生活に潜む危険がJudaism からする不安と反撥を招いたが、やがて世代の交代も絡んでそれらの葛藤を色どっていた emotional tone は単調さと感傷性を脱し、作中人物の像も複雑さと現実性が増してくる。例えば Jewishness については、同化との相関でそれへの無関心、隠蔽、拒否、憎悪から Lewisohn のような積極的肯定に到るまでさまざまな相があり、また社会主義的視点が加わっての離脱という形も生ずる。これは隠微な反ユダヤ感情への対応にもあらわれているごとく、多分に心理的な現象と相通じているからだろう。B. Hect のように同一作家がめまぐるしく急転を繰り返すケースもみられた。世代の違いは、一群の若者たちとその両親の生き方のあいだに、また配偶者選びをめぐる母と息子の考え方に露呈している。そして、周囲への異和感、不適応につきまといわれる青年や父親たちの姿もないではないが、ゲットーの生活描写にはまぎれもなくアメリカでの現実化がみてとれる、彼らはもはやアメリカにやってきたユダヤ人でなく American Jews

となったのである。ただ第2次大戦後のナチスの暴虐の実態解明とイスラエルという Jewishness の一つの核の誕生で同化傾向がやや鈍り、あらためてアメリカでユダヤ人たることの意味が問われることになるが。

この期の作品は出版界がユダヤ的素材をあまりよろこばず、M. Levin の *The Old Bunch* の場合のように登場人物に他の人種も入れるよう要求されたり、J. Weidman の非道な主人公にはユダヤ人からさえ難癖がつけられた（出たのはむしろイディッシュ文学だったといわれ、Fuchs や Odets など screen writer としてハリウッドへ行った者が多いのもこの辺の事情と関係していよう）。そして大半の作品が（作者の沈黙もあってか *Call It Sleep* すら）一時読書界から忘れられていた。それが L. Fiedler 等の啓蒙的活動をきっかけに、60年代のユダヤ系作家の興隆も手伝って彼らへの興味がかきたてられ、人種的 identity の再発見、ゲッター生活への郷愁や好奇心、さらに Jewish community の成立などがあって再評価されるようになり、Fuchs の3部作の1巻本による再刊に続いて、*Call It Sleep* のペーパーバック再版に際しては「New York Times Book Review」誌で大々的にとり上げられベストセラーとなった。出版時不評を買った *The Old Bunch* もユダヤ人社会の現代の若い世代に好んで読まれているが、アメリカ・ユダヤ系の古典としてだけでなく、シカゴ派の主要な小説の一つになっている。いずれにせよ、この期のユダヤ系文学は移民の経験を定着させるにとどまらず、移民文学を乗り越える姿勢を持つことで、次代以降のより広い領域での隆盛にとって確固としたステップであったといえよう。なお、イディッシュ文学については、M. Samuel による S. Aleichem や I.L. Peretz などの紹介もあり、現代の代表的作家 I.B. Singer もこの頃亡命してきたが、彼の本格的活動は戦後になってからである。最後にアメリカ文学の流れのなかでみれば、H. Roth のようにやや例外（といってもフロイト理論や J. Joyce の影響も当時多かった）はあるが、基調は20年代までに確立したリアリズムにある。一方この期は“lost generation”の活躍が始まる時でもあり、その手法上の実験などとり入れた者もいた（Levin における Dos Passos や Hemingway, Hect のハード・ボイルド等）、そして30年代の社会的関心からアメリカの患部を衝き、社会主義への傾斜のなかで M. Gold のようにみずからその代表的旗手となった場合もある。こうしてこの期のユダヤ系文学作品は、強弱はあれユダヤ的題材という特異さを内包しながら、いまではアメリカ文学の遺産の一部として位置づけられてよいのではなかろうか。

(A): [引用・参考文献]

Max I. Dimont:『ユダヤ人——神と歴史のはざままで』藤本和子訳（朝日新聞社、1977）

- J. Yaffe: 『アメリカのユダヤ人——二重人格者の集団』西尾忠久訳 (日本経済新聞社, 1972)
H.L. Feingold: *Zion in America* (Twayne Pub. Inc. N.Y., 1974)
I. Howe: *World of Our Fathers* (Harcourt Brace Jovanovich, N.Y., 1976)
奈良宏志編: 『ユダヤ人』(現代のエスプリ No. 121, 至文堂, 1977)
原 暉之: 「近代ロシアにおけるユダヤ人およびユダヤ人問題」(愛知県立大学『外国語学部紀要』8号, 1973)
浜野成生: 『ユダヤ系アメリカ人と日本の世紀』(弓書房, 1981)
笹川正博: 『パレスチナ』(朝日選書18, 朝日新聞社, 1974)
大島良行: 『素顔のアメリカ』(中央大学出版部, 1981)

(B): [註]

- 1) Author's Preface to "*Summer in Williamsburg*" [*The Literature of American Jews* ed. by T.L. Gross (The Free Press, New York, 1973) 所収 p. 102]
- 2) *Summer in Williamsburg* [*The Literature of American Jews* 所収 p. 106]
- 3) *Summer in Williamsburg* [*The Rise of American Jewish Literature* ed. by C. Angoff & M. Levin (Simon and Schuster, New York, 1970) 所収 p. 312]
- 4) *The Jewish Writer in America* by A. Guttman (Oxford Univ. Press, New York, 1971) p. 45.
- 5) *The Old Bunch* [*The Rise of American Jewish Literature* 所収 pp. 361-362]
- 6) *Call It Sleep* by H. Roth (Avon Books Library ed., New York, 1967) p. 441.
- 7) *Ibid.*, Afterword p. 446.
- 8) *The Lost Tribe* [*The Literature of American Jews* 所収 p. 87]
- 9) Introduction to "*I Can Get It for You Wholesale*" [*The Rise of American Jewish Literature* 所収 p. 202]
- 10) *Upstream* [*The Literature of American Jews* 所収 p. 58]
- 11) *The Island Within* [*The Rise of American Jewish Literature* 所収 p. 198]
- 12) *Jews Without Money* by M. Gold (New York, 1930) p. 309.
- 13) *The Reader's Encyclopedia of American Literature* ed. by M.J. Herzberg (Crowell, New York, 1962) proletarian literature p. 923.

(い나다 たけひこ 本学教授 英語)